

eeny, meeny, miny, moe | blue

シュヴァーブ トム | 麥生田 兵吾

2024年11月1日(金) - 11月30日(土)

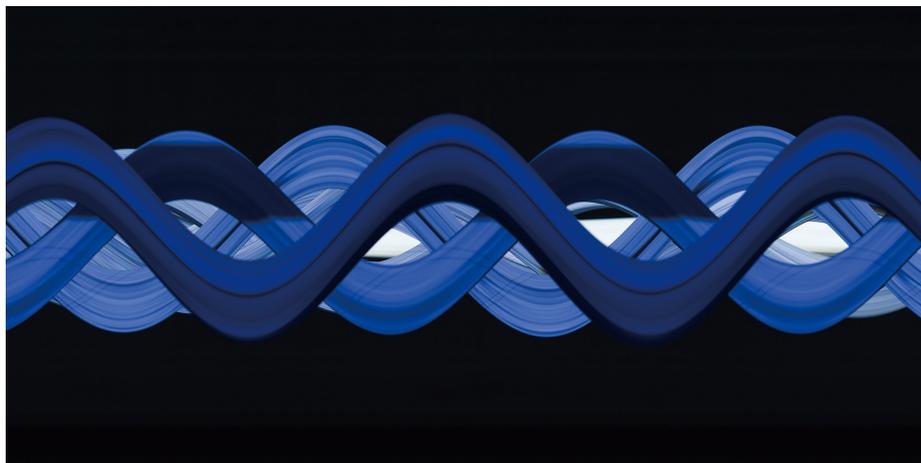
上記会期中 金・土・日 12:00-18:00 開廊

アポイントメント 承ります

2024年11月1日より シュヴァーブ トム と 麥生田 兵吾 による “eeny, meeny, miny, moe | blue” を開催致します。「色」はアーティストが作品を制作する際にとっても重要な役割を果たします。そして 無数の色彩の中から選択する一色が、ときには その作品の運命をも決めてしまう要因とも成り得るのです。本展では、そのタイトルが示すように、出展作家が「青」をテーマに作品を発表致します。作家が自発的に選択するのではなく、決められた共通の一色を課題とし、作品を創り上げていただくという取り組みです。シュヴァーブ 麥生田 両氏にとって「青」は何を想起させ、どのように使い、どう魅せてくれるのでしょうか。おのおのの「青」を存分にお楽しみ下さい。

eN arts | ロウ 直美

シュヴァーブ トム



「Aliasing V」 | 2024 | H600 x W4500 mm | Archival Pigment Print on Bamboo paper, Aluminum composite panel ©Tomas Svab

Ultramarine Infinite

見晴らしのきく地点が、その現実を定義する。これらの写真のように、振り子の波動は独立した部品の集まりとしても、連続した波の動きとしても見る事ができる。ラインスキャンカメラでは、振り子の揺れは忠実に記録されるのだが、カメラを縦にするか横にするかでは、全く異なったイメージが表れる。どちらの視点も、光の本質的な性質であるエネルギーを反映したリズムとピッチを明らかにしてくれる。振り子は長い、短いでそれぞれ光の周波数に高低差があり、我々が感じる色にも影響を及ぼすが、その中でも青色は最もエネルギーで、目に見えない「化学的な光」へと移り変わっていく。これらの振り子は光の二重性を模倣しているが、その波動は実は4兆倍以上に減速されている。

こうした光の速度に比べ、この鈍化した世界では、まるで夢から覚めたかのように、かつて私の幼少期の2つの別々の世界を分断していた夜のプルシアンブルーの領域から、時間が淡々と伸びていく。青い顔料はセルリアン（空色）の影を作り、それは私が記憶している初めて感じた自由の象徴であり、目に見えるものと同じくらい、私の中を通り抜けたウルトラマリンブルー（群青）であった。黄灰色をした石畳から、私は突然、目に見えない境界線によって区切られた大地を横切り、波の上を飛行機によって移動し、ターコイズブルー（青緑）の海を目指した。一コマ一コマ、夜明けは広大な希望を見せてくれたのである。

麥生田 兵吾



「Untitled」 | 2024 | © Hyogo Mugyuda

「Artificial S」という一つの主題に専念し制作活動している。「S」は複数の意味と複数性そのものを包含する。主題は全5章で構成され、全章を通して「生と死」が互いに溶け合うさまを表現する。また 2010 年より写真活動「pile of photographys」をweb上で更新開始（現在も継続中）。